

第5章 総括 ～大分県における中世城館の位置付け～

はじめに

大分県域の中世城館を考える場合、二つの大きな要素がある。一つは鎌倉時代に豊後国の守護職を得た大友氏が戦国時代末まで一度も豊後国を失うことなく存続した事、そしてもう一つがそれとも大きな連関を持つが、中世文書が豊富に残された地域であるという事である。前者により、特に中世後半期の地域支配や家臣団掌握、領国防衛の考え方が時代の変遷とともにパラレルに中世城館に反映している可能性があり、後者でそれを検証できる状況があるということである。

大友氏は守護として豊後国に下り、守護大名、戦国大名と進展を遂げていった。このような大名は、九州では他に薩摩の島津氏のみである。そして戦国末期にはこの両者が相まみえる事によって、豊臣秀吉による九州平定が遂行されるのである。この天正期の薩摩軍の豊後侵攻、そして文禄期の大友氏豊後除国に至るまで、戦国末期に凝縮された豊後における歴史の大転換は、多くの中世城館を歴史の表舞台に引っ張り出す事になる。現在知られる大分県、特に豊後の中世城館は、多かれ少なかれこの時期に何らかの関わりを持っているものが多い。それを示すのが同時期の文書であり、江戸期の編纂になる地誌類であり、地元での伝承である。さらに天正14年から15年にかけては島津氏側の記録(「上井寛兼日記」など)や、戦国期後半からは宣教師フロイスなどによるキリシタン関係資料(『日本史』など)といった、他地域ではほとんど見る事のできない性格の史料群があり、主要な人物の意思までが直接に(といっても、記述者に当然思想的、立場的な偏向があるのは否めないが)伝わって来るという希有な地域である。このような様々な性格の史料群と縄張り図における城館の姿が重なる時、初めて城館の意味が明らかになるのではないか。

今回、文化庁の補助を得て9カ年に渡って調査をしてきたのは、まさにこの点の解明に他ならなかった。これを明らかにする事が、中世城館全体に対する今後の取り組みの方向を定める事になるし、個別城館の史跡指定化、さらに活用に向けた方向付けにつながるのである。

以下、様々な場面毎に主要な城館を取り上げ、今回の調査の総括として大分県内における個別中世城館の歴史的位置づけを明らかにしておきたい。(城館名の後のゴシック体の数字は城館番号を示す。)

大友氏の城郭～領国支配の拠点～

大友氏と城郭を考える場合、先ず第一にあげられるのが高崎城(287)である。豊後において最も早く文書に登場する城郭は高勝寺城＝伐株山城(540)であるが、それから約20年後の正平14(1359)年、高崎城は南北朝の戦いの中で北朝方の拠点として登場し、守護大友氏時が立て籠もった。この時が初めての築城であったのかはわからないが、当該期の文書に記載のある他の幾つかの城郭もそうであるように、遺構としては押さえる事ができない。これら南北朝期の城郭を巡る攻防の共通点は、麓からの比高が数百m以上はある高い山に立て籠もった、という事である。高崎城の立地もまさにこれに合致する。

この高崎城が再び歴史の舞台に登場するのは、加判衆の一人であった朽網親満が永正13(1516)年に大友氏に対し反乱を起こした際である。永正16(1519)年正月には、高崎城に立て籠もった「朽網以下之凶徒」を大友方が攻めて、2月には落城させている。何故、反乱を起こした朽網氏が高崎城に立て籠もったのかは、文書からはわからないが、高崎城が大友氏を象徴する城であったからかもしれない。

その後、天正期以前までは大友家文書録綱文にはいくらか記載があるが、現存する文書では確認できない。天正14(1586)年11月になると、大友義統が賀来社大宮司に対して高崎に登城して普請を行った事への謝意を表している。この文書が天正期以降では唯一のものであるが、フロイスの『日本史』には、薩摩軍が府内に侵攻した天正14年12月のある夜、大友義統は「嫡子の伯叔父(田原)親賢が監視している」高崎に避難した、と記されている。しかし、「そこも安全ではなかった」ので豊前の妙見岳城に逃げる事になる(その後、妙見岳城にも居る事ができず、最終的には龍王城に移る)。つまり、少なくとも11月以前に普請をして島津氏に備えたが、攻防戦の前に高崎城を捨てて安全な豊前に敗走するのである。この時点で大友氏の高崎城が終焉を迎えたと言っても良い。この最重要な高崎城が文書に頻出しないのは、三重野氏が触れるように⁽¹⁾、大友氏直営の城郭としていわゆる「城誘」の対象ではなかったことによるものであるとすると、文書には表れない事実が隠されている事になる。この事は、高崎城の高度な縄張りを見ると明らかになる。つまり、豊後の他の城郭と比較した時、技術的にも、そして築城思想も明らかに突出した存在であるという事である。天正14年の普請の具体的内容や、それ以後、すなわち大友氏が完全に豊臣大名化する天正15年以降、豊後を除国される文禄2年までの間に普請が行われたのかどうかは文書からはわからないが、最終段階で独自の技術により古い城郭の上に所々に櫓台を付設する石塁で長城的な防御ラインを築き、大部分の主要な、そして階層差の認められる曲輪群を一体的に囲い込む城郭プランは、明らかに豊後国内の他の城郭には見られないものである。このプランは、最終的に居住することを視野に入れたものと考えられる(これについては後述)。

また、高崎城と並んで大友氏の城郭であったのが丹生島城(307)である。大友義鎮(宗麟)は、天文19(1550)年のいわゆる「二階崩れの変」によって家督を得たが、その後数年間、他姓衆らの反義鎮の動きに府内が動揺を深める中、義鎮は臼杵に居を移す。ガスバル・ヴィレラの「イエズス会員宛書簡」(文献資料編2宣教師記録部二)の中ではこの時のことを「国主は謀反を指図した大身数名を殺させ、彼自身は安全に対処するため、或る城のような島に引き籠もった」と記している。この段階で丹生島に城郭を構えたのかどうかはわからないが、少なくとも1563年のルイス・アルメイダの書簡(文献資料編2宣教師記録部七)では、国主(義鎮)は臼杵におり、「政庁」があったことがわかる。この政庁所在地であった臼杵には、天正7(1579)年頃まで家督を継いだ大友義統も住んでおり、天正6年の日向耳川の戦いで敗戦までは、臼杵の丹生島城が豊後の中心的な城郭であった。義統が府内に移ってから、すなわち政庁が府内に移ってから、天正8(1580)に宗麟は津久見に居所を移すものの、天正14(1586)年に島津氏の攻撃を受けるまで、丹生島城は宗麟の城として、そして豊後第二の都市の中核として機能していた。丹生島城は、その後近世城郭に大きく改変されており、往時の姿はほとんど知ることはできないが、フロイスは次のように記している。臼杵(丹生島)城は「三方が海面に囲まれて自然にも、また人工的にも強化された攻めにくい位置」(1588年イエズス会総長宛書簡:文献資料編2宣教師記録部三二)にあり、「満潮時に海から行くとき大きく迂回することになる」(『日本史』)とある。

また、『日本史』によると丹生島城の内部には教会のある義統の館や蔵、そしてある時期までは宗麟の邸宅があり、宗麟らは城の中に常住していた。それまでの高崎城に代表される詰め城としての山城から、居住機能を持ちかつ防御に優れ、政庁を有した城郭を大友宗麟、義統は作り上げたのである。つまり、丹生島城は山城ではなく「館城」的な城郭であった。すなわち、大友宗麟は臼杵に移った段階で、府内では実現不可能であった城と一体となった町作りを指向していたのではないかと考えられる(この点については後述)。

「南郡」の巨大城郭～有力家臣の反乱と城郭～

豊後南部は、大友氏の豊後における根本的な荘園があった大野郡などがあり、そこには有力な庶家が盤踞しており、さらに古代以来の大神氏に系譜を持つ一族もいる。大野郡には大友系の志賀氏や一万田氏、さらに周辺の直入郡には朽網氏(大友系?)、田北氏(大友系)、入田氏(大友系)、海部郡には佐伯氏(大神系)、臼杵氏(大友系)、府内周辺の大分郡には有力な大友一族である戸次氏、吉岡氏や他姓の小原氏や雄城氏などがあり、これら他姓衆、同紋衆の中から大友家臣団の中核をなす加判衆が選ばれている。

「南郡」と呼ばれるこの地には大規模な城郭が散見できる。これらの城郭は、巨視的に見ると日向・肥後国境に沿ってやや豊後内陸部に配置されているように見える。しかし、これら城郭群を大友氏が直接把握しようとしていたかどうかは疑問である。府内以北、あるいは豊後西部方面の主要な城郭は、国境の緊張の高まりの中で大友氏が「城誘」を在地に命じ、城郭の直接的な把握を行った。⁽²⁾そこは、宇佐・院内衆や山香東西一揆、玖珠衆など、大友氏が「衆」として把握した地域であり、傑出した在地領主が存在しない地域であった。逆に加判衆に名を連ねる国人の領域である南郡を中心とする地域は、それら国人に城郭の築造を委ねていたものと考えられる。そこから、16世紀前半代、すなわち大友義長・義鑑の代以降独自に城郭が展開していったものと考えられる。

その結果、いわゆる「国衆」と呼ばれる人々の築いた巨大な城郭が出現する。それらは、朽網氏の山野城(491)、佐伯氏の梶牟礼城(362)、入田氏の津賀牟礼城(398)などである。そしてそれらの城郭は、主郭回りの防備は単純な切岸のみで、主郭から離れた尾根上を何重にも掘り切るという共通点を有しており、編年的には16世紀前半代に基本的な姿が成立していた可能性が高い。注目される事は、16世紀前半から中頃にかけて反大友的立場をとったとの理由で、城主であった朽網親満、佐伯惟治、入田親廉が大友義鑑あるいは義鎮(宗麟)から誅せられていることである。⁽³⁾このことは、偶然では無かろう。そして、それらの城郭は、おそらく島津氏豊後侵攻に備えて大きく改変されるまで、古い形態を有したままであった可能性が高い。梶牟礼城は、尾根続きに新しい城「小田山城(366)」(近世の絵図では「新城」)を、津賀牟礼城はやはり尾根続きに「切寄」(近世の史料では本来の城郭を「古城」とし、新しく機能した部分を「切寄」としている)⁽⁴⁾を、山野城でも、新しく「切寄」(近世の史料では、「山之城と申す切寄山」とある)を造るのであり、少なくとも天正期後半代では旧来の城郭は機能していなかった可能性がある。すなわち、梶牟礼城と津賀牟礼城(の「古城部分」)は古い形態を残し、山野城は改変により大きくその姿を変えているということである。

そうように考えられるとすると、戦国期になり南郡各地で力を蓄えつつあった国衆は、大友氏を脅かすほどの規模の城郭を作り出したものの、主要な一族が大友氏に誅せられた事により城郭作りのエネルギーが一端そがれる事になったのではないか。それは、大友氏が戦国大名として家臣団を把握していく過程で必然のことでもあった。

国東の城郭～田原氏の世界～

では、一方これら南郡の国衆の反大友的立場の形成に大きく係わったと考えられる国東の田原氏はどのような城郭を作り出していったのであろうか。初代大友能直の12番目の子(正妻の子ではなく、京都の白拍子の子と言われる)であった

泰弘が半ば強引に田原別符の地頭職を手に入れた時から、大友惣領家との確執が始まる。室町時代には、田原氏が幕府の奉公衆として独自の活動を行い、朽網親満の乱に際しては行動を支援するなど、大友家臣団の有力な一員であるにもかかわらず一貫して大友氏と距離を置いていた。

田原氏は、国東半島中央部の田原別符からさらに海上交通の要衝であった国東の地を得、さらに発展する。この国東田原氏は、半島中央部のやや東側にある独立峰「小門山」に城郭を構える。雄渡牟礼城(224)である。ここは、大友氏の高崎城と同様、田原氏にとって南北朝期以来の拠点である。一部破壊されているが、四段に拵えた曲輪の回りを一回り横堀状に帯曲輪を巡らせるもので、斜面には4箇所堅堀が入れられるという極めて明快な城郭構造を持つ城である。この城郭の構築時期がどこまで遡るのか明確な史料はないが、田原氏の館といわれ、天文13(1544)年に築造されたといわれる亀城(225)も基本的には同じ構造を持つことからすれば、少なくとも16世紀中頃以前には成立していた可能性がある。この城と館は、国東に勢力を張った田原氏の在地における拠点として重要な城館である。

そして、国東田原氏は、ついに天正8(1580)年に親貴が大友家に反旗を翻す。俗に言う「田原親貴の乱」である。この時親貴方が立て籠もったのが安岐切寄＝安岐城(238)と鞍懸要害＝佐野鞍懸城(037)であり、さらに宇佐郡、下毛郡といった豊前南部地域を巻き込んだ動乱に発展する⁽⁵⁾。これに対して大友義鎮は、義統の弟である親家を雄渡牟礼城に入れ田原氏を継がせるとともに、田原親貴とその勢力を一掃するために豊後から大量の兵士を送り込む。大友方に入った雄渡牟礼城が、田原氏の雄渡牟礼城そのものであったのかについては文書からは不明であるが、今回の調査で雄渡牟礼城から峰続きにある御所の陣(222)と呼ばれる城郭が確認された。そこが親家に入った城郭ではないかと考えられる。御所の陣は、効果的な堀切の配置と虎口部で横矢が掛かる工夫など、この段階での大友氏の城作りの到達点を示すものとして注目される。

国境の城郭群～国境の攻防と大友氏の城誘～

大友氏の根本的な領国である豊後は、北は豊前、西は筑前・筑後、南西部は肥後、南は日向に接しており、戦国大名として成長する過程でそれらの地域との直接的な関わり合い(具体的には多くは大友領国の拡張)を有するようになる。その中でも豊前の背後にある周防の大内氏、あるいはその後の毛利氏に幾度も直接豊後にまで侵攻を許すという過程を経て、豊前国境の重要性の意識は古くから大友氏の中にあった。それは、三重野氏が指摘するように、⁽⁶⁾大友義鑑の代では日出の鹿(鳴)越城(253)と玖珠の角牟礼城(533)の城誘を天文2(1533)年頃相次いで命じ、大友義鎮の代では宇佐郡の妙見岳城(172)の城誘を永禄2(1559)年に命じていることから具体的に知る事ができる。

鹿越城は文書上で明応年間から知られるが、そこには田北氏など「鹿越城衆」が城番として立て籠もっていた。そして、天文2年に鹿越城に籠城した大内軍を討伐した後に「城誘」が山香郷の給人あてになされているのである。つまり、国東ルート、宇佐ルート、あるいは安心院ルートによって豊後の中心である府内に至る場合に、いずれも最終的に越えねばならない「鹿鳴越峠」を押さえるために、近在の土豪を「鹿越城衆」として把握し、その構築には山香郷の有力な給人を充てていたのである。鹿越城は、帯曲輪を一回りさせるだけの長方形の主郭に対し、堀切とそこからつながる堅堀は、統一的な技巧性には乏しいものの、主郭とは不釣り合いなほどに規模が大きく、片側の土塁もしっかりとしている。また、斜面の所々に兵の溜まる平場を造るなど、臨戦的で実践的な城郭である。豊後の中核である府内防衛の北の最終的な砦として16世紀を通じて機能していた。

豊前と接する玖珠郡では、南北朝期には玖珠城＝伐株山城(540)が南朝方の拠点として中核的役割を担っており、この城は“国侍持切の城”⁽⁷⁾であった。しかし、永正年間(16世紀第1四半期)を最後に文書上では確認されなくなり⁽⁸⁾、かわって玖珠郡の中核的城郭として登場するのが角牟礼城である。そして、角牟礼城では天文2(1533)年に玖珠郡衆に対して城誘が命じられた。ただし、この城誘は「新堀」の掘削に留まっており、この段階で大方の城郭構築は済んでいたと考えられる。角牟礼城は、文書上で15世紀段階から知られるが、最終的に織豊系城郭に改変されておりこの段階の姿を復元するのは難しい。しかし、主郭から幾段かの腰曲輪を設け、その最下段から堅堀を4本入れる姿は往時のものであろう。

妙見岳城は明応8(1499)年に大内氏のもと宇佐郡院内衆が同心して城郭を拵えたが、大内氏の滅亡に伴う豊前撤退によって妙見岳城は大友氏の城となる。そして、実質的な豊前・豊後国境の最重要城郭として豊前、周防方面の押さえを担っていた。そのような中で大友義鎮は永禄2(1557)年に宇佐宮社領などに対して城誘の負担を命じ、さらに天正7(1579)年には田原氏が差し籠もって普請をなしている。そして、この妙見岳城は天正期には大友宗麟の第三子で、田原親賢の養子となった田原親盛が「守将」を務めており、天正14年12月に府内が薩摩軍の侵攻で焼き討ちされると、大友義統は妙見岳城を目指して敗走する。この妙見岳城は、比高差のある山頂部の主郭から下る尾根上に階段状の平場(曲輪)を築き、その先端に幾重にも堀切を入れ、さらに斜面には60本余の畝状堅堀を

施して防御ラインを固める頑丈な城郭である。

さらに、この豊前国境には妙見岳城以外にも畝状堅堀を多用する城郭が多く見られる。国境を挟んで豊前側に3箇所、豊後側に3箇所ある。豊後側のひとつである烏帽子岳城(053)は烏帽子岳頂上に築かれ、急崖の南方向以外の三方に畝状堅堀を54本入れる、畝状堅堀で防御ラインを築いた典型的な城郭である。城誘などの文書は無いが、宇佐宮領荘園であった田染荘の南端にあつて田原山越えて山香に抜けるルート（国東方面を経由して豊後中枢に至る重要なルートの一つ）を押さえる位置にあることから、大友氏の意味が大きく働いていると見られる。

また、豊前豊後国境で縄張りの最も重要な城郭は佐田城(177)である。文書上では明応7（1498）年に「佐田古城」、あるいは「佐田山所々御陣」と記され、以後全く史料上では確認されないが、大内氏の宇佐郡代であった佐田氏の城郭として知られていた。今回の調査で初めて詳細が知られた佐田城は、山頂部に横堀と堅堀を巧みに配する主郭を中心とする曲輪群を置き、そこから派生する尾根の先端部5箇所に共通する技法で6つの曲輪群を築き、山岳を一体的に守備している大規模な城郭群である。豊前が大友氏の領国に組み入れられると佐田氏は大友氏に従い、天正7（1579）年以降数年続く豊前南部の動乱の中で、佐田鎮綱は田原紹忍と並んで鎮圧にあたっている。佐田城は、明応年間の城郭の上に新たに技巧的な城郭を築いており、その時期は永禄期から天正期と考えられるが裏付ける史料が無い。

薩摩軍豊後侵攻と城郭～陣城と村の城

一方、天正14（1586）年に薩摩の島津氏が侵入した日向や肥後の国境付近の状況は不明な点が多い。前節で述べたように南郡には巨大城郭が認められるが、国境地域の防備に特化した城郭の存在も幾つか確認できる。大友府蘭（宗麟）は天正12（1584）年に岡城の志賀道輝に宇目の「切寄」を点検させており、島津氏侵攻が現実になりつつあったこの段階では、大友氏が直接南郡の城郭の普請に関与したものと考えられる。その一つが朝日岳城(372)で、近世の史料（文献資料編1記録部二の一）には「薩摩もの打入之年拵申」とある。この朝日岳城は、島津側の記録である『上井覚兼日記』に「朝日岳ハ堺目寄々にて候間、輒針伏させ可申候」とあるように、朝日岳城が豊後を調伏するための象徴と見なされていた。ここに、大友氏は城郭を築いたのである。しかし、城郭は狭い主郭に切岸で階段状の腰曲輪を取り回し、尾根の先端付近を掘り切るといふ最先端の城郭にはほど遠いものであった。

また、確実に島津氏侵攻に備えた城郭に駒鳴砦(378)があり、ここは近世の資料では「薩摩もの打入三年已前ニ岡ノ城よりはり番を置候所」（文献資料編1記録部二の一）とされ、少なくとも天正11年には岡城(394)の志賀氏が城番として入っていた事が想定される。フロイスの『日本史』によると、天正13年頃「国主の嫡子（義統）はドン・パウロの祖父（志賀道輝）を豊後と日向の国境にある宇目と呼ばれる国境の城に配置し」たが、道輝は臆病であったため「難攻不落の所にある城の位置も信頼できず、山の峰を通る狭い道を数カ所、人力で切り崩させた」という（文献資料編2宣教師記録部二九）。この城が駒鳴砦か、または皿内砦(379)であった可能性が高い。

このように、日向国境の防備については、臼杵にいた宗麟主導のもと南郡の重鎮であった志賀道輝を中心として当たったが、大友氏と姻戚関係にある一部の国人クラスの城郭では、畝状堅堀による防御ラインの形成に向かったものもあるが、多くは堀切と切岸を多用した古い様相を残すものであった。そして結果的に多くが島津氏に内応し、豊後崩壊を導く事になることは、16世紀代を通して形成されてきたこの地域の家臣団との関係に要因があると考えられ、従前から言われている戦国大名としての大友氏の未完成さを如実に表すものであろう。

天正14年11月には島津氏は日向国境を突破し、松尾城(424)を本陣とする。この松尾城は、縄張り調査によって、旧来の城郭に大幅な改変が加えられている事が判明した。おそらく島津氏が手を入れたものであろう。この点に付いての史料は無いが、構造を見ると山頂部の片側を削り残した土塁は旧来のもので、そこから麓にかけて下る谷に造られた数十箇所にあたる平場（帯状の曲輪）が新しく造られたものである。ここからは島津氏が持ち込んだと思われる16世紀後半代の優品の陶磁器が出土する。ほぼ完璧に残存する松尾城の遺構は、陣城として貴重な遺跡である。

島津氏は、12月になるとこの松尾城を足場に府内や丹生島城の攻略を目指し北上する。府内には大友義統と共に秀吉から派遣された長曾我部元親、千石秀久らがいたが、まず府内の町を守るために「上原と称するある場所に一城を築」き、さらに、薩摩軍が攻め寄せた府内防衛の南の最終拠点であった鶴ヶ城(299)に救援に駆けつける。鶴ヶ城は「利光と称するキリシタンの貴人の城」（『日本史』）で、土塁で囲まれた主郭に対して8m近い段差のある切岸と、そこから下る畝状堅堀で堅固に守られた城郭であったが、麓の戸次河原での戦いに敗れ、薩摩軍の府内進入を許す事になった。

この他にも、大友氏関連の史料や島津側や宣教師の記録などに豊後国内の城郭が頻出する。その数はおそらく50箇所は下らないであろう。これらの城郭の内、いくつかは近世の記録(文献資料編1記録部二の二)によると「百姓等取あかり申場」であったとされる。代表的な城郭に鍋田城(413)がある。フロイスの『日本史』にリアンという老人が近隣の人々300人ばかり(最終的には3～4千人)と立て籠もった城郭と描かれる。そこには「従わねばならぬ領主はいない」とされており、いわゆる「村の城」の典型とされる。構造的にも、山頂部背後に階段状に曲輪を設けるなど、特異なものである。

豊前南部の平地城館～豊前動乱と切寄～

豊前南部の宇佐平野、中津平野は大分県内では最大の平野で、この平野を主舞台として展開したのが天正期に勃発する前述の田原親貫の乱と、それに引き続く動乱である。この平野にはいわゆる平地城館や村そのものを大きく囲い込むような土塁と堀が点在する。宮熊城(095)は、「城」と呼ばれる城郭部分とそれに引き続く集落部分を大きく一体で囲む土塁と堀があり(現状では一部が残るのみ)、全体で防御を意識した村を形成していた。時枝城(116)は、やはり狭義の時枝城があり、それを含み込む集落部分にも土塁や堀が広がっているのが確認された。高家(134)の集落も同様である。これらが文書上では「切寄」と表現されるものであった。⁽⁹⁾すなわち、天正7(1579)年から同11(1583)年にかけて頻出する「時枝切寄」や「高家切寄」がそうである。

しかし、一方「切寄」は山の上にもあった。必ずしも平地城館や防御的な村とイコールではない。田原親貫が立て籠もった城郭も、一方は「切寄」で、一方は「要害」であった。このことから判るように、「切寄」と「要害」、「城」などの用語が厳密な使い分けがなされていることからすると、当時「切寄」に何らかの共通点があったということである。しかし、今回の調査を通していても、様々な「切寄」に形態的な共通点は見いだしがたい。そうすると築城主体の共通性や大友権力の掌握の問題になるが、いずれとも決定力に欠ける。ここでは、天正7年以降、豊前動乱に伴って新しく出現した城郭と防御的な村を「切寄」と呼んだというように理解したい。すなわち、「切って寄せる」という大規模な土木工事がほぼ一斉に行われたことが、そのような固有名詞を作り出した要因と考えられる。⁽¹⁰⁾

そのように考えられるとすると、逆にそのような用語を生み出すほどの動乱であったことになる。それは、大友方と反大友方の争った、かつて経験した事がない地域を巻き込んだ争乱であった。隣村との戦が行われる中で、必然的に集落そのものの防御に向かわざるを得なかったのであろう。そのような背景から、宇佐、中津平野の中核に「城」を持つ集落を囲む村の大部分は出現したのであった。

館城の成立と展開～詰めの城から住む城郭へ～

武士の館の出現については、いわゆる「方形館」の出現が14世紀にまで下る、という橋口氏の指摘⁽¹¹⁾以来、発掘調査による検証が全国的に続けられている段階といってもよい。一方、室町期になると足利義満の「花の御所」の成立後にその影響を受け、各地に類似する方形館が出現するとされる。

では、豊後においては武士居館としての館はいつ出現し、その後の展開はどのようになったのであろうか。今回の調査で確認された館、あるいは館城は100箇所余ある。最も古いものは13世紀の上城遺跡(490)や古庄屋遺跡(086)で、13世紀後葉には岡の前遺跡(195)があり、西遷御家人である地頭の矩形を基本とする館が鎌倉時代には成立していた。このことは、旧来の勢力との軋轢や交通の要衝を占める意味、あるいは農業経営の拠点としての意味があったと考えられる。さらに、14世紀には外郭を有する真玉氏館(198)が成立していた可能性があり方形館の展開をたどれるが、15世紀前年代は不明ながらも少なくとも15世紀後半から16世紀前半にはやや比高差のある館城が居所として通例となった可能性がある。発掘調査がなされておらず厳密な時期の比定には至らないが、奈多城(206)や赤井城(174)など方一町規模のものや、発掘調査で15世紀後葉の築造が明らかになった上門手遺跡(472)や時期不明の沓掛城(196)など方半町規模のものがそうである。この脈絡の中で大友氏の上野原館(293)が出現すると考えられる。上野原館は一部発掘調査されており、15世紀末から16世紀前葉には小規模な土塁が作られ、その上に大規模な土塁が16世紀後半に構築されたことがわかっている。この15世紀末から16世紀前葉は大友義長、または義鑑の代であり、將軍の権威失墜と共に領国意識の芽生え始めた時期であり、平地館から防御に優れた館城へと居所を移したものと考えることができる。これを更に推し進めたのが天文19(1550)年に家督を継いだ義鎮であり、前記したように館と政庁を備えた丹生島城に移り、城下町と一体となった先進的な城郭を作り上げた。

この丹生島城は、終始一貫して大友惣領家の私的な空間でもあり、かつ天正7年頃までは政庁が置かれた。城下町には家臣の集住が行われたと推測される。しかし、天正8年前後には義統と共に政庁機能が府内に移る。この政庁が置かれたのは、方二町に復元できる府内大友館において他に無いであろう。しかし、発掘調査によると、現時点での知見では、この段階で厳重な防御施設が作られていたとの確証は無く、むしろ築地堀などの京風の屋敷という趣が強いと考えられている。そうすると、館城である上野原館から丹生島城へ、という居住機能と政庁機能を兼ね備えた、より防備に優れた城郭へという流れの中で、丹生島城のすべての機能が大友館に引き継がれたとは考えられない。特に、天正6年の日向における敗戦以後の豊後の混乱の中ではなおさらである。そこには、それを補う意味で高崎城の再整備という大きな課題が存在した

はずである。平地の大友館とともに高崎城の大改修が必要だったのである。それまでの詰めの城から居住機能を備えた城郭への改変である。しかし、町とあまりに比高差があり、遠く離れているという地理的要因を克服できないまま、天正14年の薩摩軍侵攻という事態を迎え、最終的には山城への居住を実現できないまま高崎城は廃城に至ったものと考えられる。

大友氏以後の城郭～織豊系城郭の展開～

天正14(1586)年の島津氏豊後侵攻による領国崩壊の後、秀吉の国割によって大友氏は豊後一国の大名となる。その結果、豊前は妙見岳城と龍王城(189)を除いてまったく大友氏の影響力は排除され、新たに黒田氏が豊臣系大名として豊前国六郡に入部した。黒田如水は山国川下流の河口付近に中津城(026)を築城する。これは、秀吉が秀長に出した朱印条々(案)の一項目にある「豊前国之儀」に忠実に則ったものであった。中津城は、九州ではもっとも古い本格的な織豊系城郭の一つとして整備されたと考えられるが、後の細川氏や小笠原氏による改築が大きく、現状では当時の姿を詳細に追う事はできない。しかし、最近の堀の発掘調査によって黒田段階の石垣の確認が進んでおり、総石垣の城郭の姿の一端が浮かび上がってきている。

この中津城と同時に造られたと考えられる城郭群が豊前南部(宇佐郡、下毛郡)に点在する。まず、先に見た「豊前国之儀」(秀吉条々)で触れられた豊後と豊前の「堺目之城」とされる高森城(100)がある。高森城は、宇佐平野を望む駅館川右岸台地上の川に突出した先端部を三条の堀と土塁で画した平城で、横堀の折れ(横矢掛かり)と櫓台状の突出部が組み合わされ、さらに土塁の切れ目には礎石建ちの櫓門が確認されており、石垣は現状では認められないものの、明らかに織豊系城郭の影響下に出現した城郭である。この高森城と同様の横堀の配置をする城郭に、台地上の山本切寄(108)と山城である光岡城(126)、高山城(091)がある。これらが黒田氏の支城として築城された城郭群と位置づけられる。

黒田氏の入部に対しては、天正15(1587)年に「豊前一揆」が起こる。宇佐、下毛、上毛郡の土豪が城井(宇都宮)鎮房らとともに立ち上がり、城郭に依りながら反抗を試みた。その城郭の一つ下毛郡の長岩城(078)は宇都宮一族の野仲氏の城で、野仲鎮兼は天正16(1588)年に長岩城に立て籠もるが、黒田勢により城郭は落城したという。長岩城は、豊後・豊前南部にあつては他に例を見ない特異な城郭で、扁平な安山岩を平積みした石塁とそそり立った屏風のような自然地形を利用して塁線を形成し、石垣を回す主郭を防備している。ベースにある城郭は尾根を複数掘り切り虎口部周囲に堅堀を有するもので、16世紀前半から中頃に形成された通例の城郭であるが、最終的に黒田氏の豊前入部に備えて石垣と石塁を多用した臨戦的な城郭に改変したものと考えられる。「天下統一」の過程で、在地側が如何に対応したのかわかる好例である。惜しむらくは後世の石積みの積み直しがどれほどなされたかが判らないが、基本的な姿は留めていると考えられる。

一方、豊後は豊前に遅れること6年の文禄2(1593)年に大友氏除国という事態を迎える。大友氏ばかりか、その家臣団が豊後を放逐されたのである。そして、その大友家臣の關所地には、豊田寛三氏の研究によると府内に早川長敏、岡に中川秀成、臼杵に福原直高、高田に竹中重利、富来に垣見家純、安岐に熊谷直陳、角牟礼に毛利高政、隈には宮城長盛が大名として入ったという。⁽¹²⁾これにより、新たに造られたのが府内城、隈城、富来城で、他は旧来の城郭を改変したものであった。また、岡城と臼杵城(大友時代は丹生島城)は近世を通して藩が存続したので幾回もの改変が重ねられる。それに対して、安岐城と高田城、隈城は藩としての存続期間が短く、後世の改変が少ない。さらに角牟礼城は築城後すぐに毛利高政が佐伯に改易され、その後森藩に入った久留島氏は小藩ということで城郭を持つ事ができず、角牟礼城の麓に陣屋を築き角牟礼城は「古城」となったため、文禄2～3年の姿を留めているとされる。その意味で、織豊系城郭の当初の姿を残す角牟礼城は全国的にも重要な城郭である。

まとめ

以上、大分県域の城館について見てきた。その結果、いくつかの重要な城館が浮かび上がってきた。それらは、高崎城や丹生島城、大友館など大友氏に直接関わる城館、佐田城など国境付近に造られた城郭や大友氏が城誘を命じたような領国の防衛戦略上重要な城郭、南郡の巨大城郭や国東田原氏の雄渡牟礼城など大友氏にやや距離を置き、独自の世界の中で作り出していった城郭、大友氏が豊臣秀吉の被官となり、そしてその後豊後も除国されたことにより出現した角牟礼城のような織豊系城郭などであった。これらが、県内569箇所におよぶ城館の頂点に位置するものである。しかし、これらの城館の下には、さらに地域に密着した数多くの城館群があり、全体として大分県域(=大友氏の根幹的な領国)の中世を形作っていたのである。これらの城館群は、また地域に還元することによって初めてその意味が浮かび上がってくる存在でもある。地名や伝承、近世以降の地誌類など地域の様々な事象も広く勘案し、個別にその意義付けを行って行かねばならないであろう。この報告書では、城館を取り巻く周辺の状況も含めて、個別城館の掘り下げはまだ十分ではなく、その意味では調査、研究はまさに緒についたばかりである。

ところで、大友氏は、「大友系」と呼べるような城郭プランあるいは技術の創出にたどり着いたのか否かという問題が残るが、現状では否定的にならざるを得ない。直接的に「城誘」に関与した妙見岳城、鹿越城、角牟礼城などは、時期的な問題から来る共通性はあっても独自の技法や共通の城郭プランの導入、さらにそこに独自の築城思想を見いだすことはできない。大友氏の豊後領国内での城作りは、対外的な緊張感の比較的少ないまま戦国期を迎え、天正期の後半になって急展開を見せたことから、当時流行していた畝状堅堀を活用した防御ラインの導入には積極的であったものの、独自の城作りを創出するまでには至らなかったものと考えられる。しかし、16世紀中頃以降、(実態は不明ながらも)館や蔵を備えた丹生島城を作り上げていったことや、天正期後半には高崎城でさらに居住機能を持つ城郭作りを目指した可能性があることは、結局高崎城での常住は実現する事がなかったとはいえ、大友氏の領国防衛政策や領国経営の一端を示すものであろう。

また、今回は縄張り調査と文書・記録の調査が中心となって城館の評価を行ってきた。しかし、発掘調査はそれらでは知る事のできない情報を提供する場合がある。例えば、記録には全くなく、しっかりとした横堀を有するふいが城(211)が発掘調査によって14世紀代には築城されていた事が明らかになった例、また小路遺跡(489)や岡の前遺跡など地表面では確認できなかった「館跡」が発掘調査によって検出された例、府内の中核施設であり豊後支配の拠点の一つでもあった大友氏館跡の発掘調査によって、その概要が明らかになりつつある例など、今後城館の評価を行う場合の重要な要素になることは間違いない。検証を行うためにも、埋蔵文化財としての中世城館の重要性をあらためて指摘しておきたいと思う。(小柳和宏)

註

(1) 三重野誠『大名領国支配の構造』校倉書房 2003年

(2) 第3章1 三重野氏論考参照

(3) しかし、一族は断絶せず、後も大友家臣団の一員としての活躍が見られる。

(4) 文献史料編1に所収の「豊後国古城蹟并海陸路程」では、津賀牟礼城は「つかむれと申す切寄、古城有」と記され、切寄と古城という2つの城があったと認識されていた。このことは「滑瀬ヨリ宇田枝迄御案内記」(『豊後国村明細帳』8巻、大分県地方史研究会、1975年)で、「梅(ママ)無礼切寄」には「岩向所所堀きりあり」と「古城」の存在を示唆していることと符合する。つまり、畝状堅堀を有する部分が「切寄」で、堀切と切岸で形成された一角が「古城」と理解できる。この場合「切寄」は、「古城」と対照的な「現役の城郭」を示す用語として認識されていたと考えられよう。

(5) 第3章2 櫻井氏論考参照

(6) 第3章1 三重野氏論考参照

(7) 『伐株山城』(玖珠町教育委員会 1984年)所収の海老沢氏論考

(8) 他の城郭に比べ平坦面が圧倒的に広く、戦国期において主郭回りをコンパクトに防衛するという方向性とは相容れない山容であることも、ここが角牟礼城に取って代わられた要因であろう。平坦面に7箇所見られる方形の土塁で囲まれた“曲輪”群の位置づけも含めて、再検討の要があるだろう。

(9) 宮熊が「切寄」と呼ばれた史料はないが、他の平野部の「切寄」構造と同様なあり方を示す。

(10) 「切寄」については第3章2 櫻井氏論考にまとめられている。

(11) 橋口定志「中世東国の居館とその周辺」(『日本史研究』330号 1990年)ほか

(12) 『大分県の歴史』(山川出版社 1997年)